

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2016 年 11 月 1 日 発行
(通巻 471 号)

現代座レポート

68

- ・第 3 次「武蔵野の歌が聞こえる」公演終了 (1)
- ・「平右衛門のことばが地域に生きている」轡田隆史 (2)
- ・「私たちの先祖の音が聞こえる」大堀金義 (3)
- ・第 3 次公演の舞台と合唱構成劇の流れ (2)
- ・「木村快さんをお招きして」はこだて音鑑・竹沢順子 (4)
- ・「わが函館の記」木村快 (5)
- ・「遠い空の下の故郷」①こぶし座での公演②小金井聖公会 (6)
- ・現代座会館活用者たちの紹介 / 2016 年 8 ~ 10 月活動日誌 (7)
- ・朗読教室発表会 / 日本力行会での講義 / 会員入会、継続、寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987



★お芝居の幕は、観客を物語の世界へいざない、そして別れを告げる大事な作法です。現代座ホールでは現在でも観客の呼吸に合わせ、日本伝統の赤い緞帳(どんちょう) 幕を裏方がていねいに引いています。

第3次 武蔵野の歌が聞こえる

ご協力ありがとうございました

2016 年 9 月 2 日から 7 日にかけて、8 ステージの公演が無事終了しました。

第 3 次公演は出演者が 15 人に増え、台本も出演者の個性に合わせて書き直しました。その結果、合唱構成劇らしい雰囲気もよく出たようです。

今回の公演はワーカーズ・コープ(労働者協同組合)の取り組みが広がり、若者らしい活気で劇場の雰囲気盛り上がりしました。東京都全域と千葉県、神奈川県、埼玉県から 230 人もの若い人たちが参加してくれています。ワーカーズの人たちは労働者自身の協同組合として地域に密着した事業を少人数で苦勞しているためか、大変社会性が強く、「協同」や「助け合い」を感じるシーンでは特に反応が高まります。年配のお客さんは「若い人がいると、こんなに劇場の反応が違うのか」と感動していました。

【観劇後の感想アンケートの特徴から】

◆舞台について——「江戸時代のお芝居がピアノ伴奏の合唱で展開されるなんて想像していなかった」、「マイクを使う劇場とちがって、心が俳優の肉声に共鳴していた」、「赤い緞帳幕で芝居の世界が始まり、そして終わる。伝統的な日本のお芝居の特徴を初めて知った」

◆内容について——災害復興や農業と TPP 問題に触れたものが多く、「江戸時代の話でありながら現代の問題として、協同の視点で語られている」、「江戸時代の歴史を現代の視点であらためて見直したい」。意外に多かったのが「子どもたちに見せたい」という感想でした。

◆来年は川崎平右衛門没後 250 年に当たります。これまでの日本史ではほとんど扱われることのなかった川崎平右衛門と、武蔵野新田が農民の協同によって生まれたことなど、現代的な見直しが進めばと願っています。

みなさん、ご協力ありがとうございました。

木村快(台本・演出担当)

初演からの観劇者数

2014 年度	
9 ステージ	755 人
2015 年度	
8 ステージ	608 人
2016 年度	
8 ステージ	
9 月 2 日 夜	46 人
3 日 昼	80 人
夜	53 人
4 日 昼	68 人
5 日 夜	80 人
6 日 昼	86 人
夜	81 人
7 日 夜	88 人
2016 年計	582 人
総計	1945 人

平右衛門のことばが、地域に生きている

轡田 隆史



くつわだ・たかふみ
1936年東京生まれ
元朝日新聞論説委員。
日本ペンクラブ、日本
エッセイスト・クラブ、
日本山岳会会員。

考えないでいようとするメディア！（ぼくもそのハシクレだけれど）

『武蔵野の歌が聞こえる』は三百余年昔を描きながら、いまそのものを批評しているのである。

舞台そのものは小さな空間だけれど、武蔵野の大地と大空の広がりを感じさせ雄大な公演である。文字通り、「武蔵野の歌」が聞こえてくるのである。舞台と客席が一体となって、噴煙をあげる富士山を不安そうに仰ぎ見る気分になるのである。

「力があつては力を出せ。知恵があつては知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」

平右衛門のことばが、ぼくのことばの奥で木霊（こだま）している。『武蔵野の歌が聞こえる』の舞台にかかわるすべての人びとは、観客であるぼくたちの「右代表」なのである。小金井市をはじめとする後援・協力の組織や諸団体もまた、現代座ホールに結集した仲間なのである。

早くも四年後の「東京オリンピック騒ぎ」に浮かれているメディアもあるけれど、過去四年間を振りかえることは、忘れているのである。四年あれば、さまざまなことがありうるのではないか。その可能性のなかの「考えたくないこと」は

ます。*轡田先生は2014年の初演以来、ずっと『武蔵野の歌が聞こえる』を見守ってください

『武蔵野の歌が聞こえる』

第3次公演の舞台と合唱構成劇の流れ



合唱①「富士が燃える」

◆江戸時代最大の危機

18世紀のはじめ、日本列島は元禄大地震、宝永大地震、富士山噴火、浅間山連続噴火と相次ぐ災害で農業は大きな打撃を受けます。人びとは「この世の末か」と天を仰ぎます。こうした大災害を体験して育った平右衛門にとって、「百姓はどう生きて行けばいいのか」が生涯のテーマとなります。

◆災害復興めざした享保の改革

徳川吉宗が第8代将軍に就任したとき、幕府は40万両に及ぶ負債を抱え、財政は崩壊寸前でした。もはや世襲の役人では幕府の改革は難しく、吉宗は大岡越前守忠相を江戸町奉行に抜擢し、共に「享保の改革」に取り組みます。

吉宗と大岡は不毛の大地と言われた武蔵野台一帯に、食料増産のため82カ村に及ぶ大新田の開発を計画します。

合唱②「新しい村をつくれ」

しかし、武蔵野は火山灰が堆積した土地で、保水が難しく、その開拓は困難を極めます。その上、気候寒冷化のため天候不順がつづき、享保の大飢饉や元文の凶作が相次いで起こり、新田開発は挫折の危機に追い込まれます。

合唱③「苦しみの歌」

◆農業改革は役人では出来ない



私たちの先祖の声が聞こえる

小金井市関野町 大堀 金義

おおほり・かねよし

3年前の初演の時、私の住んでいる小米の支給、生活安定のための小麦栽培の金井市関野町で農業をしている幼友達への奨励と肥料の貸与、さらには、若者は奥さんがこの劇を見て感動し、「この地をちろん老人、赤ん坊までが生きられる自開発した私たちの先祖の暮らしがよくわ立する村づくりなどに力強く先頭に立つかった」と言っていたが、今回観劇して、農民を指導する彼の姿が劇と歌で見事まさにその一言に尽きると思う。劇を見に表現される。そして、やっと農民たちしていると、遠い先祖達が役者さんの姿が自分の力で生きていける村ができる。借りて目の前に現れ「俺たちは一生懸命 農民たちはどんなに嬉しかったのだから生きてきたんだぞ」と声をかけられているか。劇では彼らの喜びと平右衛門へのそのような気が何回もした。

宝永の大地震と富士山の爆発という未桜であらわしているが、現に関野町の真曾有の天災の中で少年期を送り、父から蔵院や国分寺市の妙法寺にある平右衛門農民の生活の安定がいかに大切であるかの供養塔が彼への気持ちを今に伝えてい知らされた川崎平右衛門。享保の改革る。

の武蔵野82カ村の開発。私の地域でも「埼玉 同じ農業を営む友人が「これは関野町玉、奥多摩から来た」との伝承を持つ家みんなの必見の劇だ」と言ったが、それが多い。彼らは大きな期待を持ってこのだけでなく、広く武蔵野台地に住む人々に来たのだろう。しかし現実には余りににげひ見えてほしい劇だと思つた。

も厳しかった。最後に我々の先祖の姿を今によみがえ火山灰の台地、水不足、そのうえ、元らせてくれた素晴らしい劇を作り演じて文の大飢饉。その中で、困窮する農民のくれた作者、役者さん、関係者の皆さん救済と生活の安定のため尽力する平右衛門に厚くお礼を申し上げます。ありがとう門。その持ち前の行動力と斬新な発想力 ございました。で、井戸の掘削、緊急措置としての救済

組合をつくり、みんなで話し合い、土を豊かにし、二毛作を進めます。



10年かけて新田開発を成功させ、平右衛門は美濃国に旅立ちます。



幕府は開発の在り方を根底から考え直さなくてはならなくなります。開発責任者の大岡忠相は武士の役人に代えて、かねてから目を付けていた人物、百姓の心根をよく知る多摩郡押立村名主・平右衛門に新田開発の指導をゆだねます。

合唱④「小金井橋へ急げ」

◆協同の村づくり

平右衛門は老人や赤ん坊も一緒に生きられる村づくりを目ざし、全員に食料を分配し、全村一体での村づくりをすすめます。

合唱⑤「力を尽くして井戸を掘れ」

男も女も年寄りも、力を合わせて井戸を掘る協同労働は共に生きる心を育て、寄せ集め百姓の新田は、新しい地域へと変わっていきます。

すべての村に百姓の組合をつくり、自立した開発が進められます。肥料を協同で仕入れ、貧富の差なく自由に使用させ、やせた土を豊かにします。離村した農民が戻って来れば準備金を支給し、人口が増大し、新田面積も倍増します。平右衛門は飢饉に備え、収穫物の一割を備蓄させ、村共有の穀物とします。82カ村の新田は強い運命共同体の村として成長していきます。そして玉川土手には桜の苗を植えました。

合唱⑥「さくら咲く村」

◆別れ

新田開発が完成して、玉川土手に桜が咲きはじめたころ、平右衛門は幕府の要請で水害に苦しむ美濃の国へと旅立ちます。享保の改革は見事災害からの復興に成功したのです。

はこだて音鑑・音楽9条の会
木村快さんをお招きして
はこだて音鑑・竹沢順子



たけざわ・じゅんこ
戦前、中国天津で生まれる。1960年代から労音運動にたずさわり、現在にいたる。

快さんは不思議な人で、何年かわなくともいつもちゃんと私の心の中にいます。快さんと初めて会ったのは1970年、快さんが取材で函館へ来られたときでした。私は当時「はこだて音鑑」（創立時は函館労音、1994年に改称）の活動をしていて10年たっていました。だから快さんに出会うまでの間に、快さんたちを解雇した新作座の公演も観ていましたし、快さんたちが創立した統一劇場の文工隊活動を何度も函館で取り組んでいました。

函館には統一劇場と同じ1965年に創立された民族歌舞団ごぶし座があります。誕生したての二つのグループが一緒に道内を公演して回ったことも懐かしい思い出です。

私たちには統一劇場のはつらつとした若者集団がともまぶしく、大きな刺激を受けたものでした。だから快さんが70年来函されたときも初対面とは思えず、快さんもごく自然にすんな

りと私たちの中に溶け込んでくれて、そのまま何十年たつても居つづけているのです。その何十年もの間の積み重ねが私にとっては大事なのです。

とりわけ1981年から82年にかけて、『出航』公演のため函館に長期滞在していた快さんには大きな影響を受けました。当時、「はこだて音鑑」もかつてない困難に直面し、それをどう乗り越えたらいいのか、私自身も活動を続けられるかどうかで悩んでいました。

そのとき、『出航』は、困難なときこそどう生きるのかと、私たちに問いかけてきました。快さんの滞在を何度も仲間と訪れ、話を聞いて貰い、小さな学習会をしたりして、困難を乗り越えることが出来ました。そして私も今ここに居ます。「はこだて音鑑」も来年は創立60周年を迎えます。



囲む会が開かれた「はこだて音鑑」事務所。1981年から82年にかけて、木村が滞在させて貰い、公演準備に駆け回った思い出の場。

『出航』の後も現代座と「はこだて音鑑」の交流は続き、私も夫の転勤先の留萌という小さな町で仲良くなった留萌の人びとと2001年に『虹の立つ海』を取り組みました。留萌から函館に戻ってからは現代座レポートを毎回楽しみにしながら、近郊の八雲町で開催された公演にも何度か参加し、快さんと言葉を交わすことができました。

2010年の現代座レポートに掲載された『小さな船は出せるか』には大きな感動を受けました。『小さな船』の詩を声を出して読むと、涙があふれてきました。それは私がちょうど70歳になつた年で、年の暮れに乳がんになつたりで少々へこんだ時期でした。私は『小さな船』の詩を勝手に「ヒーヒーして（すみません）仲間に配りました。快さんの詩に込められた気持ちを仲間と共有し、嵐の時代に顔をそむけることなく生きていきたいと願ったからです。

*『小さな船』……かつて荒海を駆け回った船が船乗りと共に年老い、もうここまでと涙を流す。年老いた船は船乗りたちに頼んだ。「おれを小さな船に造り直してくれ、もう一度、一緒に航海を続けよう……」と。

昨春秋、『武蔵野の歌が聞こえる』のブックレットとDVDを送っていたいただきました。現代座や快さんについては、

函館で共に生き、共に歩んできた仲間と共有する思いですから、現代座の皆さんが地元の人びととどのように交流されているのか知りたいと思いました。

『武蔵野の歌が聞こえる』のあとがきに、「この作品を協同の歌として受け止めて貰えるなら、どこへでも出かけたがいし、小さな講座として語り合う場があつてもいいと思う。モノと力ネだけで破綻しつつある現代社会に対して、たとえ小さな場でも足もとの協同を見直す一助になりたいと願っている」とありました。

そうだ、快さんを函館にお招きしよう！と早速NPO現代座会員の山本國子さん、音楽9条の会の梶原康男さん（はこだて音鑑事務局長）と相談し、快さんご夫妻をお招きして、9月24日に小さな集まりを開くことが出来ました。快さんと初対面の人もふくめた20名余りの仲間とは、しっかりと共生・協同の心を共有できたと思っています。

快さんと美智子さんを見送った数日後、参加者の一人である元函館どっくの労働者、木下隆章さんから「現代座公演のDVDを見る会をやるべ」と電話がありました。高齢化しつつある私たちに、現代座は、そして快さんは、また新しい風を送り込んでくれました。うれしい限りです。

わが函館の記

木村 快

函館へ招かれ、久しぶりに造船所周辺を散策してみた。函館はぼくににとっては思い出深い街である。

1970（昭和45）年に造船労働者のミュージカルを作る企画が起こり、なぜかぼくの所へ話が持ち込まれた。造船所なら函館がいいと思った。函館どつくのことはよく知っていたからだ。張り切って函館へやってきたのだが、造船所に取材を申し込むとあっさり断られ、現場の見学も拒否されてしまった。ぼくもまだ30代半ばで若かったから、船内塗装の下請会社に頼めば下請工として造船現場で働けると聞き、身分を隠して下請会社から下請工として



函館山から望む「函館どつく」造船所。当時より規模は縮小されている。自衛艦の修理を進めていた。

しばらく働いてみることにした。

その年は労働組合の春闘が長引き、本工（正規社員）たちはストライキの真っ最中だった。毎朝、正門前には本工たちがぎっしりと立ち並び、下請工の入場を阻んでピケを張っていた。

会社側としてはこのピケを破ってでも低賃金の下請工たちで作業を進めたいわけだが、労働組合側もメンツがあるから、下請工の入場を阻止する。ところが下請会社はクリカラモンモンの入れ墨をしたやくざを先頭に立て、本工たちのピケを打ち破って場内になだれ込ませる。そんな日が続いていた。

ぼくに割り当てられた仕事は8千トン級の船のサビ落とし作業だった。船底には座礁したときのために、ハッチで密閉できる幾つもの小さな鉄の部屋があり、その内部に入り込んでサビ落としのサンダーがけをするのである。就業規則では防護マスクを着用することになっていたが、下請工には防護マスクは与えられず、両眼の上に透明ビニールを貼り付け、あとはタオルや布で顔中ぐるぐる巻きにするだけである。2時間おきに甲板にあがって15分間休憩を取るが、高温の鉄部屋で、ただただ耐えるだけだったことを思い出す。ストライキ中ということもあって、

本工たちは甲板上で花札賭博をやっていた。下請工たちはそれを憎々しげに眺めていた。それはつらい光景だった。

仕事を終わると大浴場で汗を流すのだが、毛穴にしみこんだ鉄サビは洗っても洗っても落ちない。身体を洗いなから、それとなく声をかけると、出稼ぎの農民や遠洋漁船の乗組員が何人もいた。ちょうど200海里問題で北洋漁業が困難になっており、倒産で廃船になる船が多いのだと言う。一般社会から隔絶され、海しか知らない運の悪い男たちにとっては、この過酷な作業がせめてもの救いなのだという。

造船所を出ると、雑貨屋と呼ばれる労働者が必要とする雑貨を売る店が並んでいて、そこでは立ち飲みで升酒を飲ませていた。1合か2合の升酒を飲みながら、下請工たちの身の上話を聞いた。多数派が豊かになる裏側で、少数者の無視できない現実があった。

その造船所も今では商船の発注が少なく、専ら海上自衛隊の自衛艦改造や修理が本業のようになっているらしい。

このときの体験は、現実をどのようにつくべきかについていろいろ考えさせられた。右肩上がりの経済成長期に入った時期だが、労働組合を組織する本工たちと、組合から守られない下請

工では大変な格差があった。しかも、下請工の方が多数で、船の半分以上を造っていたのだ。

労働組合文化の最盛期だから、それに疑問を突きつけるような作品を書くこともできず、経過はいろいろあったが、結局この企画はだめになった。

百姓が百姓では食えなくなり、遠洋漁船で働いていた者がどんどん失業している現実。運の悪い者はどうするのか。弱者の側に生まれた者はどう生きるのか。それがぼくのテーマになった。

それからも機会を見ては函館をたずね、遠洋漁業や開拓農民の実態を調べた。そして十年後の1981年に制作したのが『出航』である。廃船になった漁船員たちが、解散式で沖揚げ音頭を歌っているうちに、「どうせ果てるなら海で果てたい」と言い出し、また展望のない海に繰り出していく。豊かさを求める現代では信じられない、きわめて非現実的な話である。

海員組合からは「内容が暗い」と後援を取り消され、劇団内でも「どうせ果てるなら」は前向きじゃないと評判が悪かった。だが、なぜかこの作品は実際の劇場では圧倒的に支持された。理屈の問題ではなく、下積み世界の共感を得たからだろう。この作品はぼくにとって大きな転機となった。

遠い空の下の故郷

〜ハンセン病療養所に生きて〜

①稽古場での小さな公演会

こぶし座 計良正子



けいら・まさこ
1978(昭和53)年、民族歌
舞団こぶし座に入座。民族舞踊・
篠笛奏者。この日は篠笛で歌の伴
奏をつとめていただく。

9月25日、NPO現代座の木村快さんと木下美智子さんが、「音楽9条の会」の催しで函館に連れられ、「こぶし座」にも寄っていただきました。

久しぶりの来訪に、座員一同は大喜び！

こぶし座は「芸能で心をつなぐNPO」として活動する民族歌舞団です。現代座とは今から50年前、創立間もないこぶし座と共に、約一ヶ月間、北海道内の職場や地域を巡演したことから交流が始まりました。

それ以来、快さんはことあるごとにこぶし座を気にかけて、節目の公演に駆けつけてくれたり、北海道で仕事がある時には立ち寄って励まし続けてくださっています。

この度は、美智子さんが「遠い空の下の故郷」という作品を私たちの稽古場で語ってくださることになり、座の社員や後援会員ら25名の仲間たち



が集まったの小さな公演会となりました。元こぶし座代表の国田修二さんも駆けつけてくれ、私たちの仕事の在り方を考える貴重な場になりました。

「療養所で生活する人たちは『ふるさと』という歌がとて好きで、よく歌われます。みなさん一緒に歌っていただけませんか？」

〜兎追いしかの山 小ぶな釣りし、かの川……。

静かな歌声の余韻とともに、お話が始まりました。

「私は小さいときから川辺で遊ぶのが好きでした。子ども心に水がぬるんでくると春が近いなと感じたものです……」、少女の頃に暮らした美しく懐かしい故郷の風景が、色鮮やかに映し出されるような語りは、小学生の時の発病、その後の家族の生活、療養所入所の葛藤と覚悟、母への想い……そして、療養所での過酷な日常と絶望へと、時に激しく静かに淡々と進みます。語り手の声はいつしか元ハンセン病患者の方の声そのものとなって、聞く者の心に深く強く優しく染み込んできました。

静かな問いかけが身体中を駆けめぐり、胸がいっぱいになりました。歴史の真実と大切な友人の心を伝えつづける木下美智子さんのうたと語りは、NPO現代座の求める共生のきずなとなって、参加した仲間たちの心をつかりと結んでくれました。

これからも多くの方々に聞いて頂けることを願っています。ありがとうございました。



巡演用小型バスの前で
こぶし座の仲間たちと

②小金井聖公会で

10月22日(土)午後2時から、小金井市・小金井聖公会のファミリーフェスタで「遠い空の下の故郷」を公演しました。小金井聖公会の役員の方たちは何年か前にも現代座3階小ホールでの公演を見てくださっています。近年は聖公会でもハンセン病についての問題意識が高まっており、現代座に声をかけたいと思います。続けていってくださったのだそうです。

この日は手作りのバザーも行われて、和気あいあいとした賑やかな雰囲気でした。皆さんニコニコしながら礼拝堂に入って来られます。そして語りが始まると、シーンとして深くうなづきながら聞いてくださるのです。チラシを見てはじめてこの教会に来られた方もかなりいらしたし、聖公会東京教区の人権委員の方たちも参加してくださいました。落ち着いた礼拝堂のたたずまいの中で、教会の皆さんのあたたかい心遣いに包まれるような公演でした。(木下美智子)

語り・木下美智子 アコーディオン・松本真理子



現代座会館 活用者たちの紹介

現代座会館はNPO現代座会員として多くの方が利用してくださっています。

【定期的な地域の講座など】

- ◆「緑町ふれあいサロン」、地域の雑談会。毎月1回。
- ◆「熟年会」、高齢者のためのパソコン、タブレット勉強会。毎週2回。
- ◆「早稲田ラジオ・スクール」、通信教育で教員資格を取る人たちがサポートする教室。毎週1回。
- ◆「バンビノ」、障がい児の放課後預り事業。手をつなぐ親の会がボランティアで子どもたちを見守っている。毎週1回。

【演劇専門集団】

- ◆「希望舞台」は現代座会館に事務所を置き、NPO現代座といっしょに会館を支えてくれている劇団です。8月から新しいメンバーによる水上勉作『釈迦内板唄』を稽古し、9月に試演会を行いました。終戦後の廃墟の中で一生懸命生きる少年たちを描いた『焼跡から』も8月から9月にかけて稽古して九州公演、10月には北海道公演へ。
- ◆「シアター青芸」は現代の若者たちに特攻隊とは何であったのかを伝える『ウインズ・オブ・ゴッド』の稽古をして、秋の高校公演に出発していきましました。『武蔵野の歌が聞こえる』に出演している木の下敬志さん、八木浩司さんが出演しています。
- ◆「クロジ」は声優さんを中心にした演劇グループで、毎年大がかりなセットを組んで20日間以上稽古し、都内のホールで公演しています。8月に3週間稽古。
- ◆「燐光群」は社会派の劇団として知られ、毎年地下ホー

ルで長期間の稽古を行っています。今年は6月〜7月に使用。

- ◆「スタジオ・ポラーノ」は今年の『武蔵野の歌が聞こえる』に出演した八木澤賢さんの主宰するグループです。宮沢賢治の童話をこども達に観てもらうため、10月は『注文の多い料理店』と『どんぐりと山猫』の2作品の稽古をしました。

【NPO現代座会員の市民創造活動】

- ◆「劇好サポテンアミーゴ」は毎年のように現代座ホールで公演している市民劇団です。今年は11月5日(土)6日(日)に『煙が目にしみる』を公演します。
 - ◆「コロレ・デ・ラヴォーチエ」は3階で教えた子たちの「リトル・コンサート」を開いている音楽家の津田さん夫妻が設立した集団です。11月27日(日)には3階小ホールで『うた芝居・白雪姫』を公演します。
 - ◆「BONBON組」は現代座の舞台に出演している矢川千尋さんと八木浩司さんが参加している演劇グループです。一昨年も3階小ホールで『べっかん鬼』を上演して好評でした。今回は落語の「死神」から題材をとった創作劇『死神の使い』を12月2日(金)、3日(土)、4日(日)に3階小ホールで上演します。
 - ◆「りんどうの会」は元現代座員の杉山龍さんが主宰する朗読グループです。今年はトルストイの『人はなんで生きるか』のホール公演、『一房の葡萄』を3階小ホールで上演。来年2月にはトルストイの『人はなんで生きるか』をホールで再演します。杉山さんは3階小ホールでの語り公演と、ホールでのトルストイ公演をやり続けていきたいと考えています。
- 現代座会館はこうした皆さんのおかげで管理運営費を捻出していますが、多くの方の創造の場として活用していただけるのがよりうれしいことです。

現代座会館 8月〜10月 活動日誌

【本部】

- 7月31日 「現代座レポート67号」発送作業
- 8月17日 「武蔵野の歌が聞こえる」サポーター会議
- 18日 「緑町ふれあいサロン」
- 9月14・21日 木村快「日本力行会」でブラジル移住の講義
- 15日 「緑町ふれあいサロン」
- 23〜26日 木村快、木下美智子、招請を受け、函館へ
- 10月20日 「緑町ふれあいサロン」
- 22日 「遠い空の下の故郷」小金井聖公会公演
- 30日 「SPレコード雑談会」

【現代座ホール】

- クロジ「きんとと」稽古 8月1〜21日
- 「武蔵野の歌が聞こえる」8月22〜9月8日
- 希望舞台「釈迦内板唄」稽古と試演会 8月、9月、10月
- 希望舞台「焼け跡から」稽古 8月、9月、10月
- シアター青芸「ウインズ・オブ・ゴッド」稽古 9月、10月
- むさしの芝居塾「近江屋」公演 10月1〜2日
- スタジオ・ポラーノ「注文の多い料理店」稽古 10月
- スタジオ・ポラーノ「どんぐりと山猫」稽古 10月

【3階小ホール】

- 津田「うた芝居・白雪姫」稽古 9月、10月
- りんどうの会「人はなんで生きるか」うた稽古 8月、9月
- BONBON組「死神の使い」稽古、10月
- 10月17日 小金井女声合唱団・練習
- 25日 清水智子先生ピアノ教室

隔水曜日 現代座朗読教室

毎火曜日 東志野香のヨガ教室

【定期使用 2階サロン】

- 毎日曜日 早稲田ラジオスクール(学生支援)
- 毎月曜日 子どもクラブ・バンビノ
- 毎水曜日 熟年パソコンサークル
- 隔木曜日 iPad熟年講座

誰でもできる朗読教室

9月28日(水)午後1時半から、現代座3階小ホールで「NPO現代座・誰でもできる朗読教室」の2期生発表会が開かれました。

2期生は10人。4月から毎月2回、2時間半の講座で発声等の基礎訓練をして声を作り、色々な作家の本を、みんなで楽しみながら読んできました。8月からは発表会に読む作品を選んで練習してきました。

そして12回目の最後の講座は発表会です。仕事の都合で参加できなかった方がひとりいましたが、9人の受講生は、舞台の照明の中で、半年間の努力と練習の成果を精一杯発表しました。それぞれの個性が生きた朗読で、あつと言う間の2時間半でした。



10月からは第3期の教室が始まりました。今回から受講する新しい人も含めて、定員いっぱい10人が集まりました。次の3月の発表会が今から楽しみです。

ブラジル移民の歴史を伝える

東京都練馬区の日本力行会(りっこうかい)は明治30年から若者の海外移住を支援し、ブラジル移民の生活擁護でも大きな役割を果たした組織です。ブラジル移民史は政府が公的資料を焼却したため、今も正確な歴史は不明です。

力行会の幼稚園には毎年ブラジルから研修生が来ています。研修生に日本力行会とブラジル移住の歴史を伝える講義を木村快が行っています。

今年の研修生は2人。原タイス・サオリさんは小学校中学校を日本で過ごしました。新明(しんみょう)チェリーさんは日本で生まれ3歳の時ブラジルに帰りました。どちらも両親が日本に働きに来ていたのですが、おじいさんたちがいつ日本から移住して、ブラジルでどう生きてきたのかを調べたいと言っています。

今回の講義は2回だけですが、『共生の



左・新明チェリーさん

右・原タイス・サオリさん

大地・アリアンサ』(木村快著)のポルトガル語版を読んで貰っています。少しでも私たちの歴史を考えるきっかけになれば、と願いながらの講義でした。

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

- 一般会員 3,000円
 - 協賛会員 10,000円(1口以上)
- 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座